

## ウエンディは何者であったのか

『ピーター・パン』と社会帝国主義

高田英和

## 1

マーティン・グリーン (Martin Green) の『ロビンソン・クルーソー物語』(*The Robinson Crusoe Story*) は、ダニエル・デフォー (Daniel Defoe) の『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*, 1719) を雛形としながら、その後、イギリス帝国及びヨーロッパで綿々と続いた同様の型の物語、ロビンソネイドの系譜を明らかにしている<sup>1)</sup>。その中でグリーンは、J・M・バリ (Barrie) の『ピーター・パン』(*Peter Pan*, 1904) をロビンソネイズの極点と位置付けている (153-60)。

この作品が示す変化、つまり、舞台が想像上の島、ネヴァーランド (Never Land) に設定され、主人公の少年、ピーター・パン (Peter Pan) の成長が疑問視されることは、帝国主義の教具としてのロビンソネイドがその伝統的な役割を果たしえなくなったことを示している。要するに、『ピーター・パン』においてロビンソネイドは終焉し、空想 (fantasy) になったのである。

本稿の要点は、グリーンの議論をまず認めることにある。つまり、植民地主義的なロビンソネイドの最終段階としての『ピーター・パン』は、もはや、島を想像上のものとして考えない

と成立しなくなっているわけであるが、それは、男性性に関してピーターの成長の拒否というかたちで現れており、他所で検証した<sup>22)</sup>。では、女性性についてどうなっているかを本稿は考察する。

その先行研究としては、サリー・ミッチェル (Sally Mitchell) の議論がある。ミッチェルは『新しい少女』(The New Girl) において、一八八〇年以降、少女の取り巻く環境——出版業界の競争化・商業化、学校教育の義務化、児童労働法の改正と経済情勢の変動、雇用機会の多様化、学問・専門職教育の延長の機会など——の変化、要するに、近代化とともに、もはや子どもではないがまだ大人にはなりきれていない、年齢ならおおよそ八歳から一八歳までの「新しい少女」が出現したことを明らかにしている (110)。そして、これとの関連で、ミッチェルは、世紀末から二〇世紀初頭にかけての英国において少女を物語の中心にした冒険小説が数多く出版されたことについて述べている。少年冒険小説を多く書いたことで有名な G・A・ヘンティ (Henry) の『兵士の娘』(A Soldier's Daughter, 1906)、『少女たちのヘンティ (the girls' Henry)』と異名をとったベッシー・マーチアント (Bessie Marchant) の『ハトリエット、郵便配達員』(Juliette, the Mail Carrier, 1907) や『末っ子の妹』(The Youngest Sister: A Tale of Manitoba,

1913) などである。ミッチェルによると、これらの物語に登場する少女たちは、概して、穏やかさと淑やかさを持つ反面、男勝りな気性の持ち主たちで積極的に行動するという。家庭を切盛りし男性に付き従う姿勢を有している一方、ポートで海原を、また、そりで雪原を突き進む方法を、彼女たちは心得ている (114-17)。『ポーター・パン』においてなら、洗濯、料理、裁縫という活動を怠らなく行う少女のウェンディ (Wendy) が、飛行などをすることになる。ミッチェルは、このような特徴を持つ少女たちは最終的に結婚し良き妻として家庭に入らなければならなかったと説明している (116-17)。では、ウェンディにはミッチェルの論考は適合するのであろうか。

本稿は、ミッチェルの議論を補助線にしながら、エドワード朝期におけるロビンソネイドの変容を考察する。より具体的には、『ピーター・パン』をウェンディをヒロインとする冒険物語として捉え、それを、ミッチェルの示す「家庭の天使」と「新しい女」の分別の図式に沿って見て行きつつ、帝国主義の容態の変化との関連性の中で論じることにする<sup>23)</sup>。

## 2

ウェンディは「家庭の天使」<sup>24)</sup>の系譜に属する少女である。

それは、次の引用文から、見て取ることができるとは。

ウェンディは、植物の繊維から作った紐を暖炉の上に張って、洗濯物を干しました。〔……〕

料理をしているとき、彼女は常にお鍋に付ききりでした。

〔……〕

ウェンディの大好きな時間は、彼らの寝た後に行く、裁縫をしているときでした。(Barrie 134-35)

ネヴァーランドにおいてウェンディは男の子たち——ピーター、ロスト・ボーイズ (Lost Boys)、『ジョン』(John)、『マイケル』(Michael)——のために「洗濯 (washing)」、「料理 (cooking)」に忙しく、彼女はたぐいしの「縫い物／繕い物 (sewing/darning)」をしながら「未婚女性がうらやましいわ」(Barrie 135)と言葉を漏らす、その顔には笑みがこぼれている。ウェンディは子を沢山持つ、母親のような少女である。

料理、洗濯、裁縫という当時の少女たちにとって好ましいとされたこれらの活動は、この時期の初等学校(義務教育)において強調されていたものである。例えば、一八九七年の「イングランドにおける家庭科指導」(“Domestic Economy Teaching in England”)によると、一八八二年から一八八三年までの間、

料理を教えた学校の数は四五七校であり、料理を学んだ少女の数が七、五九七名であるのに対して、一八九五年から一八九六年までの間、同じく料理を教えた学校は二、七二九校に、料理を学んだ少女は一三四、九三〇名になっている。同様に、洗濯に関して、一八九一年から一八九二年までと一八九五年から一八九六年までの期間における学校の数とそこに在籍した少女の数を比較すると、学校は二七から四〇〇に、少女は六三二から一、七二〇に増えている (Education Department 159, 167)。そして、中でも特に裁縫は少女教育にとって重要であるという趣旨が、一九〇九年の「裁縫の指導要領」(“Suggestions for the Teaching of Needlework”)から窺われる。興味深いのは、当時ミシンが普及していたにもかかわらず、あえて手作業による裁縫を推し進めている点である。それは、手作業による裁縫の方が、少女の中に生まれながらにして備わっている女性としての資質に強く響き、少女に女性としての嗜みを身に付けさせられるとされていることにある (Board of Education 3)。

料理、洗濯、裁縫は何も学校教育においてだけ強調されていたものではない。指摘するに留めるが、一九一〇年に発足したガール・ガイド (Girl Guides) と当時の少女たちに絶大な人気を誇った少女向けの雑誌である『ガールズ・オウン・ペーパー』(“Girl’s Own Paper”) においても同様に強調されていたの

である。

このように、物語の中においてウエンディが従事する洗濯、料理、裁縫という活動は、彼女を「家庭の天使」化する道具として機能している。「家庭の天使」性を習得することは、ウエンディのような当時の少女たちに社会が求めた必須の項目であった。彼女たちは依然として強く働いていた、少女は少女らしく、女性は女性らしく振る舞うことを良しとした社会的風土の中で生きてゆかざるを得なかったのである。

### 3

他方、取り分け、ロビンソネイドの系譜の中で考えるとき、ロンドンの家族を離れて、ピーターと共にネヴァーランドに行き活動をするウエンディを、ヴィクトリア朝期的な「家庭の天使」に単純に還元はできないだろう。それは、端的には、彼女の身体活動に表れる。彼女は当時一般的に少女たちには相応しくないと考えられていた水泳、テニス、サイクリングなどと同様の身体活動をしているように見受けられる。その身体活動は「飛行」である。

「僕たちは岩の上にいるんだよ、ウエンディ」とピーターは

言いました。「……」「すぐに水で覆われてしまうよ。」「……」「私たちは行かなくてはいけないわ」とウエンディは言いました。「……」

「泳ぐの？ それとも飛ぶの？ ピーター。」「……」

このように2人が岩の上に座っていると、何かがピーターに触れました「……」。

それは尻尾でした「……」。……」ピーターは尻尾をつかみ、そして、尻尾を引寄せました。「……」ピーターは尻尾をウエンディの体に巻きつけました。「……」ピーターは岩からウエンディを押し出しました。すると、二、三分もしない内にピーターの視界からウエンディは消えてしまいました。(Barrie 151-52)

ウエンディは「……」あちらこちらへと尻尾に飛ばされていたのです。(Barrie 156)

ウエンディはネヴァーランドのラグーンでの増水により窮地に追い込まれるが、飛行という身体活動によってその危機的状況から脱する。ここで、ピーターの質問に答えながら、ウエンディが、水泳ではなく、飛行を選ぶことは重要だろう。

例えば、ジュディ・ロマックス (Judy Lomax) の『空中の

女たち』(Women of the Air)によると、当時、女性がこの身体活動をするは大変まれであり、名をエリザベス・メアリ・アム・シェパード(Elizabeth Mariam Shepherd)、愛称をドリー(Dolly)という女性が気球で空高く舞い上がり地上数千メートルからパラシュートで降りてくるという見世物で有名になったことがわかる。彼女の一九〇八年六月の飛行についての記事が『挿絵入りの警察報』(The Illustrated Police Budget)に掲載されている(Shepherd 112-13, 図一)。

実際ウエンディは、物語の重要な場面で、「非女性」的な身体活動を行うばかりではなく、敢えて当時見せ物にもなったような「飛行」を行う。このようなシーンの登場は、彼女が



図1

(「家庭の天使」的な側面を含み持ちながらも)いわゆる「家庭の天使」のステレオタイプからはっきりと異なったタイプとして提示されていることを示唆しているだろう。

また、ウエンディは「戦闘」という、女性には似つかわしくない身体活動に対しても肯定的であるようだ。

ウエンディは〔……〕戦闘中〔……〕ピーターの戦う姿を目を輝かせながら見ていました。戦闘が終わり〔……〕、マイケルが彼女に彼が海賊を殺した現場を見せると、彼女はうれしさのあまり身震いしてしまいました。(Barrie 204-5)

ウエンディは戦闘に従事しはしないが、彼女の立ち振る舞いから、戦いに対する彼女の前向きな姿勢が窺われる。それは、また、ウエンディと少年たちが海賊に捕らわれ殺されそうになったときに彼女が見せる、決して怯まない精神力と、少年たちに對して英国紳士として死ぬことに誇りを持って鼓舞する姿に表れているように思われる。

この時、ウエンディは堂々としていました。「坊やたち、これが私からの最後の言葉です」と、彼女はしっかりと態度で言いました。「私はあなたたちの本当のお母さんたち

からの言付けを預かっているような気がします。それはこのようなものです。「うちの息子たちが英国の紳士みたいに死ぬことを、わたしたちは願っています。」(Barrie 192)

そして、最後にもう一つ、ウエンディの特徴の一つとして、彼女の性的態度、彼女の「キス」を挙げる事ができよう。ウエンディがピーターの影法師を彼の足に縫い付けてあげた後、ピーターが女の子は一人で、二〇人以上の男の子の働きをするよとウエンディを褒めると、ウエンディはお返しにとピーターにキスをしようとす。しかし、ピーターはキスがどういふものかを知らないで、代わりにウエンディは指貫をブレゼントする。暫くして、再び、ウエンディがピーターにキスをせがむと、ピーターは先ほどの指貫をウエンディに返す。すると、ウエンディはキスとはこういうものよとピーターにキスをするのである (Barrie 90-95)。

このように、当時概して少女たちに悪影響を及ぼすと考えられていた身体活動をし、それに対して積極的に関わっていくウエンディは、いわゆる「家庭の天使」に当てはまらない面があることは無視できないであろう。ある意味で、ウエンディには、二〇世紀初頭の近代化とともに現れた「新しい女」<sup>⑤</sup>の系譜に属する面がある。

#### 4

しかし、言うまでもないことだが、「家庭の天使」の表象が、常に、典型的な「家庭の天使」像だけを提出してきたわけではない。既に確認したように、ミッチェルの議論は、「新しい少女」の誕生とそれの最終的な「家庭の天使」への回収という二本立ての議論から成立していた。つまり、ミッチェルは『*John Doe*』が成長して最終的には「家庭の天使」になると説明しているが、少なくとも『ピーター・パン』については、この指摘は受け入れられない。それは、(1)ピーター自身が成長しなくて、この「ファンタジー」に成長概念がないからであり、(2)より具体的には、ウエンディも最初から「家庭の天使」的、母親的人物で、成長して良妻賢母になるわけではないからである。要するに、成長の欠如によって、「家庭の天使」と「新しい女」が対立項ではなくなるという奇妙な事態が、『ピーター・パン』の女性性には起こっている。ミッチェルの議論から見るとき、ウエンディの特異性は、ロビンソネイドにおいて「家庭の天使」が主体化された状態で出現していることにある。そして、この問題は、ロビンソネイドの極点としての『ピーター・パン』において、成長概念に疑問符が付されることと関連してい

る。

『ゴーター・パン』以前のロビンソネイド、例えば、フレデリック・マリヤット (Frederick Marryat) の『マスターマン・ランダ』(Masterman Ready: or, the Wreck of the Pacific, 1841) に登場するミセス・シーグレイヴ (Mrs. Seagrave) は、レベッカ・ウィーバー＝ハイタワ (Rebecca Weaver-Hightower) が述べているように、「従属的客体としての「家庭の天使」の地位に留まっている (55-59)。彼女は、終始、料理や裁縫などの家事以外に、孤島での生活に貢献することは決してない。体が丈夫ではないが優しいミセス・シーグレイヴは (Marryat 11) 常時男たちによって守られるべき象徴的な存在の女性である。

ウェンディは物語の中で、「新しい女」的な行動をしながらも、常に「家庭の天使」的人物として振る舞うことに対して自覚的である。彼女のフルネームは「ウェンディ・モイラ・アンジェラ・ダーリング (Wendy Moira Angela Darling)」である。彼女のミドルネームは、彼女が物語の最初から母親としての役回りを心得ていること、生粋の「家庭の天使」であることを思わせる。M・ジョイ・モース (Joy Morse) は指摘しているが (297-98) 問題は、彼女が「生粋」の「家庭の天使」であるとき、上述したキスのシーンとも相まって、それが、彼女に

とって、異性愛的なアピールの項目となることである。物語のはじめにおけるゴーターとの対面の場面で、彼女は、既に針仕事の技術を習得していて、それをさりげなく披露する (Barrie 89-91)。ここに、混乱がある。自らの「家庭の天使」性を男性にアピールする女性は「家庭の天使」なのだろうか。それとも彼女は、近代化とともに現れた、セクシュアリティについて開放的な「新しい女」なのだろうか。

また、ウェンディは、ロビンソネイドの系譜に属する作品であるL・T・ミード (Meade) の『孤島の4人』(Four on an Island: A Story of Adventure, 1892) に登場するイザベル (Isabel Frazer) とは異なる少女性を有している。イザベルの特徴は、彼女が生まれながらのお転婆娘 (tomboy) 言い換えると「新しい女」であり、それに「家庭の天使」的要素が付随していくことにある。イザベルと一緒に遭難した仲間の少年から「あなたは真のリーダだ、本当のキャプテンだ。あなたは、はじめから、僕の二倍の度胸と勇気を持っていったんだね」と慕われている (Meade 201)。そして、ジュディス・ローバトム (Judith Rowbotham) が示しているように、「最終的に彼女は家庭的な女性へと成長して、物語は終わるのである (110-11)」。世紀末から二〇世紀初頭までに書かれた少女を主人公にした冒険小説において、登場人物としてのお転婆娘は成長すると

「家庭の天使」になると論じるミッチェルの論考は、(イザベルに適合するにしても) ウェンディには——彼女には「家庭の天使」とお転婆娘の両方の面は確かにあるが——当てはまらない<sup>60</sup>。ここまで辿ってきたように、「家庭の天使」と「新しい女」の二項対立という前提から、ウェンディの造形を理解しようとするとき、そこには根本的な混乱が生じるように思われる<sup>70</sup>。

この問題にこそ、バリの『ピーター・パン』が、ロビンソネイドの末裔として、当時の帝国の言説をどのように引き受けていたかについての根本的な考察への鍵があるだろう。それは、ひとつには、ミッチェルの論考の基本枠となっている成長概念というものが、そもそもウェンディには内面化されていないということであり、また、他方、ミッチェルが相反する要素と無意識に考えている「新しい女」性と「家庭の天使」性という区分が、実はそもそもバリにおいてはなされていないということである<sup>80</sup>。ピーターの「ほくちちが必要としているのは、ただ、やさしい、お母さんみたいな人なんだよ」という発言に対して、「まあ！ それ、わたしにぴったりだと思っわ」(Barrie 132)と応えるウェンディは、飛行という身体行動をし、自らキスをする女性である。ウェンディは、「家庭の天使」、あるいは、「新しい女」の奇妙な変奏、もしくは、そこからの逸脱として

ではなく、エドワード朝期の社会が新たに提示した女性像として認識されなければならないだろう。

## 5

「家庭の天使」性と「新しい女」性が相反するのは、かつての旧植民地経営におけるジェンダー配置との関連にあり、帝国の拡張の終焉期になると、実に、それは矛盾しなくなる。ポリア戦争を契機に、帝国が以前のような拡張主義を遂行することが難しくなったエドワード朝期は、帝国の維持という問題が前景化された時代であった<sup>90</sup>。そして、それはドイツ、特に、アメリカという新興国の躍進と大いに関係があった<sup>100</sup>。例えば、『デイリー・テレグラフ』(Daily Telegraph)の元記者で後に『オブザーバー』(The Observer)の編集者となったJ・L・ガーヴィン(Garvin)が一九〇五年に「帝国の維持」(“The Maintenance of Empire”)という題で帝国に対するドイツとアメリカの脅威について書いている。「ドイツとアメリカは[……]人力、国費、兵力、軍事費の点で、我が帝国に追い付いている」(81)。このように帝国の衰退という危機下にあった英国では、一九〇六年に総選挙が行われ、ジョゼフ・チェンバレン(Joseph Chamberlain)を筆頭として臨んだ政権政党の

保守党が、ハーバート・ヘンリー・アスキス (Herbert Henry Asquith)、『デイヴィッド・ロイド・ジョージ (David Lloyd George)』、『ウィンストン・チャーチル (Winston Churchill)』を擁する自由党に敗れるという事態が生じた。そして、新たに政権を担うことになった自由党は、帝国が陥っていた崩壊、分裂という危機的状况を打破すべく、一九〇七年に「帝国会議 (The Imperial Conference)」を開き、「自治植民地 (カナダ、ニューファンドランド、オーストラリア、ニュージーランド) との関係強化し、また、一九〇九年に開いた「帝国防衛会議 (The Imperial Conference on Defence)」では、大国化しつつあるドイツ、アメリカに対する軍事力の強化を、自治植民地と協力して行うことを取り決めた<sup>11)</sup>。つまり、帝国は、この時期、福祉国家的な政策によって、一つに纏まり、維持に力点を置いていた。これは社会帝国主義 (social imperialism) のなせる業であったのである<sup>12)</sup>。

帝国の維持期は、海外におけるイギリス人家庭のあるべき姿の像も変えていくことになる。そこにおいて、「家庭の天使」の淑やかさと「新しい女」の活発性という二つの性質を同時に有する、ウェンディのような新たな少女像が誕生するだろう。その端的な例として、二〇世紀のはじめにおける英国女性の国外への移動、つまり、「女性／少女移民」が挙げられる。この

時期に行われた女性移民はそれまでとは違い、移民者は移民先の植民地において自立的、主体的に行動することを求められていた。その多くが中産階級出身者であった。以前の移民は、最初は、「余った女」、「家庭の天使」であったが、彼女たちは移民先の厳しい環境に適応できずに、徐々に労働者階級出身の女性たちに取って代わられた。しかし、労働者階級の女性たちは移民者としては質が悪いとされ、再び、教養のある中産階級出身の女性たちに戻っていった。それが、先ほど述べた、中産階級の女性の移民である。要するに、移民女性像は時代と共に「家庭の天使」(一九世紀中後期) ↓ 「新しい女」(一九世紀末) ↓ 「家庭の天使」+ / + 「新しい女」(二〇世紀はじめ) へと変化していったのである。これは、先程、言及したロビンソネイドにおける女性キャラクターの変容と、実に、一致する。また、重要なことに、この時期に多くの少女が移民として植民地に出て行った。少女は、大人の女性とは異なり、素直で従順で適応能力が高いと見なされ、幼いうちに植民地へ赴くことで、素早くそこでの生活に順応するであろうと考えられたからである。少女の移民も、同様に、できるだけ良質の子女が選ばれた。特に、帝国の中でも最も忠誠を尽くしていた自治植民地のカナダには、英国から多くの女性／少女が移民として送り込まれたのである<sup>13)</sup>。この時期、植民地ナショナリズム (colonial

nationalism)が高まっていたカナダは、帝国と対等な関係を主張し始め、新たに世界の覇権を握ろうとしていた「帝国」アメリカと親密な関係を築こうと画策していたからである<sup>14)</sup>。この時期の「女性／少女移民」の意義は、帝国を分裂させず、一つの纏まりとしてのその全体性を維持することにあった。気品があり、活動的である英国の女性たちを植民地に移民させ、彼女たちがそこで生活している英国男性移民者たちと結婚し、家庭を、家族を築くことで、帝国の崩壊を阻止しようとしたのである。

例えば、二〇世紀初頭、多くの女性たちを植民地に送ることに尽力した団体、「イギリス女性移民協会 (British Women's Emigration Association [BWEA])」の一九〇八年の年次報告書 (*Annual Report*) には、「移民は、勃興する国々に影響を及ぼすことが可能な唯一の方法であり、移民のみが、それらの国々に「我らアングロ・サクソン人の理想」を伝えられるのです。そして、女性だけが植民地に家庭を築くことができるのです。女性移民なしに、帝国の存在は考えられません」(34)と記載されている (Hamerton 163)。また、当時、BWEAの重鎮であったエレン・ジョイス (Ellen Joyce) は、一九一三年、提携する団体である「少女友愛協会 (Girls' Friendly Society)」の総会で、「カナダが「ブリティッシュになるかロシア

ポリタンになるか」は今後五年以内の女性移民によって決まるでしょう」と発言している (Hamerton 164)。

上記の事柄と関連するように、一九一二年に出版された、ガール・ガイドのマニフェストともいっべきものの、『ガール・ガイドのハンドブック』(*The Handbook for Girl Guides or How Girls Can Help Build the Empire*) には、少女たちの果たすべき務めの一つはフロンティア (帝国植民地、自治領) での生活を送ることにあり、そのため、彼女たちは、いつ何時、フロンティアへと向かわざるを得ない状況に備えて、そこでの生活に耐えうる準備をしていなくてはならないと示されている (Baden-Powell 16, 23-24, 33-34)。筆者のアグネス・ハイデン＝パウエル (Agnes Baden-Powell) は、この本の中で、ポーランド戦争後に問題視された人種と国家の退化について言及している。そして、彼女は、帝国を維持すること (holding the Empire)こそ、少女たちに課せられた重要なアクションであると彼女たちに告げている (319-20, 413-14)<sup>15)</sup>。また、『ガールズ・オウン・ペーパー』においても同様に、少女たちに植民地への移民を促す記事が度々掲載されていたのである。例えば、少女たちへの学校紹介の記事 (“Gardening as a Profession for Girls: How They Are Trained at Swanley, and the Demand for Competent Students”) の後半部分の Part II (17 June,



図2

1905)には、「本校 (Swanley Horticultural College) の教育課程は、植民地での生活を考慮に入れずには成立しない」(Shepstone 396)と述べられており、そこには、あからさまに、彼女たちが移住すべき植民地の重要性が示されている。さらに、植民地での厳しい生活に対応できるようにであろう、一九〇七年一〇月五日号の『ガールズ・オウン・ペーパー』には「ライフルクラブ」の紹介の記事が載せられており(4、図2)、『ガール・ガイドのハンドブック』ではライフル銃による「射撃(shooting)」の方法が説明されている(Baden-Powell 285-87)。エドワード朝期英国の少女たちが女性として求められた要素は、ウェンディのように、「家庭の天使」的穏健さと「新しい女」的活発さの両方であった。相反すると

思われた二つの女性像は、当時の社会において、決して矛盾したものではなかったのである。

『ピーター・パン』がファンタジーになることが、グリーンの言うように、帝国主義言説との関係で理解されるなら、ウェンディの女性性の変化も、帝国主義の言説の変化と連動しているだろう。そして、それは、具体的には、上述した「移民」と関係がある。ピーターが最初からウェンディと共にネヴァーランドに行くのは、彼らが、植民地を開拓する帝国主義者というよりも、むしろ移民家族としてイメージされていることを意味しているからにある。シティに勤める父を持ち、両親は社交会に出向き、週末は家族で田舎にて過ごすという(Barrie 69, 72, 79, 207)。これまでなら、帝国の中心に位置する英国に居るべき存在と思しきウェンディは、ネヴァーランドに、ピーターだけでなく、ジョンとマイケルを連れ立って行く。それは、植民地が帝国から分離しないように、彼女が、彼らが、家族で、ネヴァーランドという植民地に向かい、そこにイングリッシュネス(Englishness)を植え付け、英国との関係を、帝国という全体性を維持するためにである。ゆえに、彼女は「家庭の天使」的でありながら、活発に、主体的に行動する。それは、また、厳しい植民地で生活するために必要であるからだ。つまり、彼女がネヴァーランドに行くことの意義は、ネヴァーランドと

いう植民地を本土と同様の空間に仕立て上げること、要するに、英国化／自国化 (domesticate) することにある。彼女の行為は、帝国を維持することと密接に連動しているのである。

ウエンディが背負う責務としての帝国の維持は、物語の結末において、これ以上ない鮮明さで、説明されることになる。

ウエンディは結婚しました〔……〕。〔……〕

それからさらに年月が過ぎ、ウエンディに娘が生まれました。〔……〕

彼女はジェーンと名付けられました〔……〕。(Barrie 220)

ジェーンは今やマーガレットという娘を持つまでの大人になりました〔……〕。マーガレットが大人になると、彼女には娘が生まれるでしょう〔……〕。そして、それは途切れることなく続くでしょう〔……〕。(Barrie 226)

この時期、帝国は女性化 (feminised) していたという (Chilton 66-72)。特に、植民地世界は、女性が主となって行動することを称え、それに依存させられていたのである (Marquis 60-

63)。この場面、ウエンディ、ジェーン (Jane)、マーガレット (Margaret) という少女の繰り返しは、男性的で拡張主義的な社会に代わる、維持を目的とする国家における女性の重要性を示しており、それゆえに、女性の絆が強調されているのだ。ウエンディとその直系の娘たちが、帝国植民地と思しきネヴァーランドに途切れることなく訪れ続ける理由は、その地と彼女らの生家のあるロンドンとを一つに結び付けることによって築かれる、全体性、要するに、帝国を維持することにある。

## 6

本稿は、『ピーター・パン』に登場するウエンディの行動／生活様式を通して、エドワード朝期に起こったロビンソネイドの変容を考察した。グリーンが述べたように、一九〇〇年以降、個性性を失い、嘲笑の対象になったロビンソネイドは『ピーター・パン』において終焉し、空想化、幻想化された。それゆえ、ウエンディの女性性もまた、変化せざるをえなかった。ウエンディは、二〇世紀初頭に転回した、維持に重きを置いた帝国主義国家と密接に関係する女性であったのである。

\*本稿は、日本イギリス児童文学会第四〇回研究大会（一橋大学、二〇一〇年一月二七日）にて発表した原稿に加筆、修正を施したものである。

- (1) 「帝国の時代」に関連するロビンソネイドとイギリス児童文学に力点を置いて、そこで描かれる主体について分析しているものとしては水間を、イギリスの帝国主義と児童文学との関係については Richards を参照。
- (2) この点に関する詳細な議論は、State Library of New South Wales, Sydney, Australia にあつて開催された The 12th International D. H. Lawrence Conference (29 June, 2011) にて発表した拙稿 “The Boys Who Would Not Grow Up: D. H. Lawrence, J. M. Barrie, and New Liberalism” を参照。
- (3) 本稿では、一九一一年に出版された小説版の『ピーター・パン』(Peter and Wendy) を主要テキストとして扱うことにする。
- (4) 「家庭の天使」について、川本は「家庭の天使」とは、一口で言うなら、家庭という神殿を司る天使のごとき女性という意味である。つまり、家庭という場で〔……〕夫を支える良き妻であり、子どもを慈しむやさしい母である〔……〕女性のことなのだ。彼女はつねに正しく清くやさしく、自己犠牲と献身によって周囲の人々を照らし導いていく〔……〕存在である」と述べられている (8-10)。
- (5) 「新しい女」にしろ、Showalter は「余った女」との比較において「性的に自由な「新しい女」は結婚が女性にとって人生を満たす唯一の選択であるという社会的主張を批判した。
- (6) Mitchell は『マスタートーマン・レディ』に関しては Eleanor Acland が一九三五年に出した『マスタートーマン・レディ』の改作本 (Goodbye for the Present: The Story of Two Child-hoods, Milly, 1878-88, and Ellen, 1913-24) —— 自身を乗組員として物語内に登場させた—— にて、『孤島の4人』に關しては Meade が難破物語を書いたことについて言及しているのみである。
- (7) Clark はウェンディが母親的人物でありながら家父長制と帝国主義に反する性質を有していることを指摘している。
- (8) 「家庭の天使」と「新しい女」の関係について、例えば、Langland は「家庭の天使」の変容態として「新しい女」を見ていて、両者の間に存在する隔たりを取り払おうとしている。
- (9) 本稿において、私が「維持」と言っているのは、本質的に、領土の拡張云々とは関係ない。ひとつには、Magdoff が言うように、「帝国主義」の意味が変わって、植民地主義から、資本主義の最終段階としての独占資本主義に変わることであり、他方この変化は、国内では new liberalism による、植民地主義批判から支えられていたことにある。それは、また、Williams が述べているように、「萌芽的」文化、その様式そのものでもあつた。
- (10) 河野は、E. M. Forster の *Howards End* (1910) に潜む、新たな「帝国」アメリカ＝「勃興的グローバルイゼーション」の存在の重要性を指摘している。

- (11) 当時の自由党にちなむ帝国の再編をいっくば、Hyatt Searle を参照。
- (12) 一般的に社会帝国主義とは、ドイツ社会主義に対する批判であるが、Rose を Semmel にうつした論者たちは、new liberalism との関係でエマヌエル朝期のイギリスをいっくば使用しているが、本稿はその用法に倣っている。
- (13) この時期における女性／少女移民をいっくば、Bean and Mel-

参考文献

Baden-Powell, Agnes. *The Handbook for Girl Guides or How Girls Can Help Build the Empire*. 1912. London: Girl Guides Association, 2003.

Barrie, J. M. *Peter and Wendy*. 1911. *Peter Pan in Kensington Gardens and Peter and Wendy*. Ed. Peter Hollindale. Oxford: Oxford UP, 1991. 67-226.

Bean, Philip and Joy Melville. *Lost Children of the Empire*. London: Unwin Hyman, 1989.

Board of Education. *Suggestions for the Consideration of Teachers and Others Concerned in the Work of Public Elementary Schools*. Rev. ed. London: HMSO, 1909.

Chilton, Lisa. *Agents of Empire: British Female Migration to Canada and Australia, 1860s-1930*. Toronto: U of Toronto P, 2007.

- ville' Hammerton' Parr を参照。
- (14) 二〇世紀初頭のカナダにおける植民地ナショナリズムと「帝国」アメリカとの関係をいっくば、Craig' Eddy and Schreuder' Thompson を参照。
- (15) 「バーナム・ガーン」の当時の社会的意義をいっくば、Hynes, Mackay and Thane, Warren を参照。

Clark, Emily. "The Female Figure in J. M. Barrie's *Peter Pan*: The Small and the Mighty." Eds. Danna R. White and C. Anita Tarr. *J. M. Barrie's Peter Pan In and Out of Time*. London: Scarecrow, 2006. 303-19.

Craig, Gerald M. "A Historical Perspective: The Evolution of a Nation." *Understanding Canada: A Multidisciplinary Introduction to Canadian Studies*. Ed. William Mercalle. New York: New York UP, 1982. 81-142.

Eddy, John, and Deryck Schreuder. "The Context: The Edwardian Empire in Transformation and Decline, 1902-14." *The Rise of Colonial Nationalism: Australia, New Zealand, Canada and South Africa First Assert Their Nationalities, 1880-1914*. Eds. John Eddy and Deryck Schreuder. Sydney: Allen, 1988. 19-62.

- Education Department. *Special Reports on Educational Subjects: Education in the United Kingdom and the European Continent*. 1897. Rev. ed. Kyoto: Rinsen, 1974.
- Garvin, J. L. "The Maintenance of Empire." *The Empire and the Century*. 1905. Ed. Charles Sydney Goldman. London: Routledge, 1998. 69–143.
- Girl's Own Paper*. Vol. 29. London: RTS, 1907–1908.
- Green, Martin. *The Robinson Crusoe Story*. Pennsylvania: Pennsylvania State UP, 1990.
- Hammetton, A. James. *Emigrant Gentlewomen: Gentle Poverty and Female Emigration 1830–1914*. London: Croom Helm, 1979.
- Hyam, Ronald. "The British Empire in the Edwardian Era." *The Twentieth Century*. Eds. Judith M. Brown and Wm. Roger Louis. Oxford: Oxford UP, 1999. 47–63. Vol. 4 of *The Oxford History of the British Empire*. 5 vols. 1998–1999.
- Hynes, Samuel. *The Edwardian Turn of Mind*. Princeton: Princeton UP, 1968.
- Kerr, Rose. *Story of the Girl Guides*. London: Girl Guides Association, 1932.
- Langland, Elizabeth. *Nobody's Angels: Middle-Class Women and Domestic Ideology in Victorian Culture*. Ithaca: Cornell UP, 1995.
- Lomax, Judy. *Women of the Air*. London: John Murray, 1986.
- Mackay, Jane and Pat Thane. "The Englishwoman." *Englishness: Politics and Culture 1880–1920*. Eds. Robert Colls and Philip Dodd. London: Croom Helm, 1987. 191–229.
- Magdoff, Harry. *The Age of Imperialism: The Economics of U. S. Foreign Policy*. New York: Monthly Review Press, 1969.
- Marquis, Claudia. "Romancing the Home: Gender, Empire, and the South Pacific." *Girls, Boys, Books, Toys: Gender in Children's Literature and Culture*. Eds. Beverly Lyon Clark and Margaret R. Higgonet. Baltimore: John Hopkins UP, 1999. 53–67.
- Marryat, Frederick. *Masterman Ready; or, the Wreck of the Pacific*. London: Longman, 1841. 7 Nov. 2011 <<http://www.archive.org/stream/mastermanreadyor1marrich#page/n7/mode/2up>>.
- Meade, L. T. *Four on an Island: A Story of Adventure*. London: W. and R. Chambers, [1892].
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girl's Culture in England 1880–1915*. New York: Columbia UP, 1995.
- Morse, M. Joy. "The Kiss: Female Sexuality and Power in J. M. Barrie's *Peter Pan*." Eds. Dana R. White and C. Anita Tarr. *J. M. Barrie's Peter Pan In and Out of Time*. London: Scarecrow, 2006. 281–302.
- Parr, Joy. *Labouring Children: British Immigrant Apprentices to Canada 1869–1924*. Toronto: U of Toronto P, 1994.
- Richards, Jeffrey. ed. *Imperialism and Juvenile Literature*. Manchester: Manchester UP, 1989.
- Rose, Jonathan. *The Edwardian Temperament 1895–1919*. Ohio: Ohio UP, 1986.
- Rowbotham, Judith. *Good Girls Make Good Wives: Guidance for Girls in Victorian Fiction*. Oxford: Blackwell, 1989.
- Searle, G. R. *A New England?: Peace and War, 1886–1918*. Oxford: Oxford UP, 2004.
- Semmel, Barnard. *Imperialism and Social Reform: English Social-Imperial Thought 1895–1914*. London: George Allen, 1960.

- Shepherd, Dolly. *When the 'Chute Went Up: The Adventures of an Edwardian Lady Parachutist*. London: Hale, 1984.
- Shepstone, Lena. "Gardening as a Profession for Girls: How They Are Trained at Swanley, and the Demand for Competent Students." *Girl's Own Paper*. Vol. 26. London: RTS, 1904-1905. 424-428. 506. *Selections from The Girl's Own Paper, 1880-1907*. Ed. Terri Doughty. Ontario: Broadview, 2004. 97-102.
- Showalter, Elaine. *Sexual Anarchy: Gender and Cultures at the Fin de Siècle*. London: Virago, 1992.
- Thompson, John Herd. "Canada and the 'Third British Empire,' 1901-1939." *Canada and the British Empire*. Ed. Phillip Buckler. Oxford: Oxford UP, 2008. 87-106.
- Warren, Allen. "Citizens and Empire: Baden-Powell, Scouts and Guides and an Imperial Ideal, 1900-1914." *Imperialism and Popular Culture*. Ed. John M. Mackenzie. Manchester: Manchester UP, 1986. 232-256.

———. "Mothers for the Empire? The Girl Guides Association in Britain 1909-1939." *Making Imperial Mentalities: Socialisation and British Imperialism*. Ed. J. A. Mangam. Manchester: Manchester UP, 1990. 96-109.

Weaver-Hightower, Rebecca. *Empire Islands: Castaways, Cannibals, and Fantasies of Conquest*. Minneapolis: U of Minnesota P, 2007.

Williams, Raymond. *Drama from Ibsen to Brecht*. 1968. Harmondsworth: Penguin, 1973.

———. *Marxism and Literature*. Oxford: Oxford UP, 1977.

川本静子『〈新しい女たち〉の世紀末』みすず書房、一九九九年。

河野真太郎『「ハワーズ・エンド」とグローバル・イングランド文化の出現』『言語社会』第五号、一橋大学大学院言語社会研究科、二〇一〇年、九六—一一一。

水間千恵『女になった海賊と大人にならない子どもたち——ロビンソン変形譚の行くえ——』玉川大学出版部、二〇〇六年。

(たかだ ひでかず／博士後期課程)